27日

分科会① 「森のわらべ」の10年を振り返って
その軌跡から見えてくるもの……

講師：浅井智子（自然育児　森のわらべ多治見園・園長）

「森のわらべ」の10年は、森のようちえんを「運営」していく上で、大事なことを教えてくれる道しるべでもあると思います。森のようちえんに携わって10年の、苦悩と喜びに満ちた歩みを綴った年表を振り返りながら、子どもだけでなく、そこに携わる大人たちの在り方を問う森のようちえんの醍醐味を分かち合いました。

2004
きっかけは 2004 年愛知県春日井市の森のようちえんとの出会い。「知ることは感じることの半分も重要ではない」というレイチェル・カーソンの言葉に感銘を受け、入園を決意。その後の4年半では、立ち上げスタッフの方向性の違いから分裂もあった。保育においてはプロでも運営においては素人集団の集まりである森のようちえんでは、こうしたことは珍しいことではなく、全国の森のようちえんで見られること。分裂後、2006 年正規スタッフへ。2007 年には園長代理に。自分たちの園の発展だけを考えていては拡がらない。森のようちえんに対する認知を増やすことが大事と、講演会活動開始。2008 年森のようちえん全国ネットワーク役員就任。

2009
地元多治見で、森のわらべを開園。年少さん2人からスタート。未就園児対象の親子組は当初から満員。月1開催の「森わら広場」も人気。地域での需要の高まりを感じる。

2010
保育料値上げ、スタッフ退職などにより園存続のピンチ。以降、園児は増えてきたが、入園時には両親ともに志望理由を記載いただき、面接をし、森での育児への覚悟を問う。

2014
園長として初めて、自分が園長をやっていてもいいのだろうか、辞めたほうがいいのではないか、と思うような試練があったが、アドラー心理学やカウンセリングの手法とも出会い、大きな心持の変化を経験し、ありのままの自分に OK を出せるようになり、保育や運営の面白さから現場を離れられず今に至る。

2015
現在、税理士との契約、新HP開設など、森わららしさを伝えていくことを大事に、今も進化&深化を遂げている「森のわらべ」。

分科会② 日常の遊び場
～だれでも始められるはじめの一歩

講師：前野学美（たじみプレーパーク楽風）
/ 諸橋なつき（おうちプレーパーク）

講師両名から、プレーパークを始めたきっかけやこれまでの経験を話してもらい、参加者がそれぞれに「はじめのいっぽ」を踏み出せるよう、背中を押す分科会となりました。

たじみプレーパーク楽風
- たじみプレーパーク楽風の活動の様子から、子どもたちの遊びの魅力を知る。
- 講師が楽風を始めたきっかけを聞く。
- 「日常のほっとできる」「学校でも、家でもない第三の」「のびのびとできる」「どんな家庭の子どもでも　遊ぶことができる」そんな場所でありたいと思い活動をしている。

おうちプレーパーク

Q: どんなところ?
A: 町中の空き家を活用。毎週水曜日放課後、近所の子どもたち 20 名程が歩いて集まってくる。

Q: どんなことしてる?
A: 木工や焚き火など自由な遊びだけでなく、おうちならではの暮らしの手仕事も遊びの一つとして行っている。（梅仕事、干し柿、味噌作り、畑など）

Q: はじめたきっかけは?
A: イベント的な非日常ではなく日常の子どもの居場所をつくりたいと思い 1 人でもできる規模で始めた。

「はじめのいっぽ」で大事なこと
- 仲間・場所・お金・広報などにこだわらず、まずは出来ることから始めてみることが大切である。
- 両活動だけではなく、もっと小規模で始まった「一畳プレーパーク」（埼玉県）を紹介。
- 子どもを温かく見守る大人がいる日常こそが大切でありそれは近所の子どもたちを気遣う「あいさつ」からでも始められる。

分科会③ 遊びの中で生きる力を育てる
～子どもの遊びはAKB!?

講師：渡部達也・美樹（NPO 法人ゆめ・まち・ねっと）

「子どもの成長・発達は結果であって目的ではない」。遊びの価値と子どもの育ちの関係について、大人と子どもでは理解が違うということを気付かせてくれる分科会でした。

- 大人が企画するプログラムやイベントは 11 年間、一切せず、子どもの自由で主体的な遊びを保障することで「遊びの中で生きる力を（自ら）育てる」場を開いてきた。そんな活動の名場面・珍場面の数々を「遊びのAKB（あぶない、きたない、ばかばかしい）」という切り口で紹介。
- 大人が期待する育ちには、勤勉性、協調性、自律性、社会性などがあるが、それらは子どもたちが自由に遊ぶことで獲得していく。例えば勤勉性は、大人の設定した課題をキチンとこなせば身に付くのではなく、子どもたちが「楽しむために」自ら課題設定して遊ぶ中で培われる。
- そうした遊びの中で育つ生きる力が検証もされている。大人に対して「困ったときも前向きに取り組むか?」と聞くと、子ども時代に自然体験が多かったと答えている群は Yes36.4%、少なかった群は Yes9% と明かに差異がある。（詳くは国立青少年教育振興機構のHP参照）

Q: 生きる力をつけること以外に、「学び」や「勉強」についてはどう思いますか?
A: 「学び」が誰かを幸せにしたり、社会をよりよくしたりするために使われるのであれば、勉強もあり。そうした思いで、平日夜、プレーパーク育ちの子どもたちの勉強を見たりもしている。

Q: プレーパークを開きたいが、公園内で火を起こしていい場がなかなか見つからない。
A: 公園は市民のものであって、市役所はただの管理人。役所にはまずそれを理解してもらいたい。その上で、焚き火の効用を共有したい。火を使いこなすことは災害時などにも役立つ。焚き火周りでの振る舞いは社会性を育てる。

分科会④ 森のようちえんにとって好ましい場所づくりとは?
環境モデル林で考える　森のようちえん

講師：萩原ナバ裕作（岐阜県立森林文化アカデミー）

行政による里山整備・遊び場づくりをしていく上で忘れてしまいがちな大切なことを再確認。今回の会場となった古城山をはじめ、県内各地に「本当の遊び場」を行政からしっかりと応援してもらいながら、「市民の力」でつくっていきたいものです。そうすれば、市民も森も、そして地域も良い方向へと育つことでしょう。

県が整備し、市と地元団体が運営している古城山環境保全モデル林を会場に、グループに分かれてフィールドを自由に歩いてもらい、「もしここを子ども達の遊び場にするとしたら、何があったらいいか」を話し合いグループ毎にアイデアを発表してもらいました。

- ハンモック、ツリーハウス、キャンプ場、チェンソー体験、夜の森を探検、ヤギを飼って畑もつくって里山の暮らし&持続可能な暮らしの体験場にしたいとか、子どもだけでなく大人が集える場所にしたいとか、管理棟（ログハウス）をもっと解放（土足禁止ではなく）したいなどなどユニークなアイデアがたくさん出ましたが、参加者からこんな意見が……。待てよ…。いろいろあるのも楽しいけれど、「生きる力」の強い子を育てたいのであれば「何もいらないのでは」……という意見に皆「ハッ」とさせられた。
- 「何かをやってもらう」「つくってもらう」のではなく、「遊びも楽しさも自分たちで創る」ことが重要。必要なのは、設備でも遊具でもなく、自分たちで遊び場をつくれるための「道具」と「自由に手を入れられる環境」そして「そこで過不足なく関われる人」につきる!という意見に会場から拍手!

オフショット

裸足で裸で
おもいっきり
遊んだ子ども達

夜の
交流会のごはん
は羽釜炊き

火を囲み
音楽を奏で踊る
自然にできる
人の輪！